

スとして扱っていたのは興味をひいた。「テタ」自体は科学を模倣した擬似医療であるようにみえた。しかし、友人の霊的な施術に救われたかつての自分の存在も事実であった。

トルコでの滞在が3ヵ月を過ぎる頃には私はブルサへ移り、その期間はルームメイトの状況を詳しく聞くことはなかった。再び彼女を尋ねた時には「テタ」を辞めたことを告げられた。先生への不信感からそのように決心したとのことであった。これからどうするのか尋ねる私に対して彼女は「次は量子力学(Kuantum)の先生からセッションを受けてみるつもり」と返した。そして『量子力学・スーフィズム』[Tuncay 2019]というタイトルの本を勧められた。ここから先は正直私には手に負えないと思ったが、誰にとっても“探求”は続いていると感じた瞬間であった。

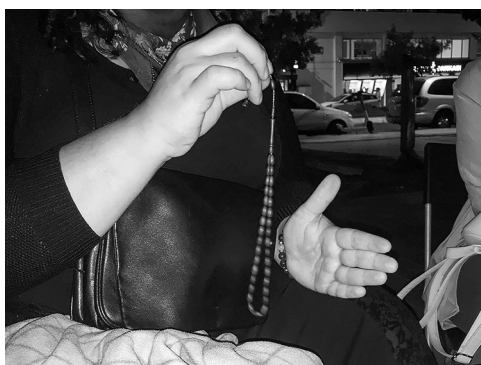


写真2 タスビーフ（数珠）を用いてダウジングを行なう友人

引用文献

- 鎌田 繁. 2002. 「輪廻」大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』岩波書店, 1053-1054.
Tuncay, Yalçın. 2019. *Kuantum Tasavvuf*. Istanbul: Az Kitap.

場所を与えられる、持つということ

—福岡市・天神でのフィールドワークを通して—

北 條 七 彩 *

安直な入り口

「屋台の研究をしているんです」と伝えると、大概の人に面白がられた。23歳の大学院生が、屋台の一席に陣取り、2021年10

月11日から12月19日までの70日間、福岡県天神でフィールドワークを実施したのである。筆者は都市や公共空間、場所の利用について関心があった。「アフリカ地域研究専

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

攻」に所属する身として、ケニア都市部の零細商人の研究を志していた。ケニアに渡航する前の訓練として、日本で調査ができないものかと考え、数年前に旅行で福岡を訪れた際に屋台でラーメンを一杯すすったことを思い出した。どうやら調べると、戦後のヤミ市から慣習的に存続してきたものが、行政の試みにより観光資源となり、最近では屋台の重要性が再認識されているらしい。歴史性、政治性、そして公共空間を利用し、商売を行なっているという点で、筆者の関心にぴたりと当てはまった。「面白いかも。」ひょんなことから国内での調査テーマを見つけ、屋台研究の暖簾をくぐった。

「空間」と「場所」

終始、昼夜逆転の調査だった。屋台は18時以降に開店し、営業は日付をまたぐ。17時になると一斉に歩道に屋台が並び始め、午前4時までには屋台は撤収する(写真1, 2, 3参照)。日中と夜の天神の街を歩くと、どうも同じ通りを歩いているとは思えない不思議な感覚のずれがあった。屋台は、おでんや焼

き鳥、ラーメンを提供するだけの、単なる胃袋を満たす場ではなく、都市に独特のにぎわいを生み出す[出口2004]。その独特さは、コの字型の密集した席が誘発する店主や客、客同士の会話から生まれる。日中には存在しなかったにぎわいが、屋台の出現によって生まれる。同じ「空間」であることには変わらないが、明らかに異なる「場所」に変化していた。

「空間」とはなにか。インゴルド[2021: 345]は、「空間の世界とは、存在しつつあるような撚り糸によって織られているのではなく、存在する者によって満たされていて、



写真2 閉店後の屋台



写真1 18時頃の天神



写真3 17時に歩道に現れる屋台

居住されるのではなく占拠されるような世界」という。屋台空間でいう「存在する者」とは、店主や客だ。インゴルドの言葉を借りるとすれば、屋台を空間の世界として捉えたと、彼らは居住者ではなく、占拠者になってしまう。

では、屋台を「場所」として捉えてみる。「場所とは結び目のようなもの」とインゴルドはいう。空間は屋台を均一化した建築物として捉え、空間をいかにして機能的・有効的に活用するかを問うてきた。福岡のみならず、東南アジアをはじめとした屋台研究が主に、建築学で研究蓄積があるのはそのためであろう。一方、屋台を場所として捉えたと、然り糸が結び目のように織られる。たしかに、店主を起点とした社会関係にもとづいて形成される屋台という「場所」は、多様な人の結節点のように思われた。筆者は、70日間の調査を通して、屋台内で結ばれている社会関係について、いくつかの興味深い点を発見した。

通された席と与えられた場所

屋台のコの字型の座席は、どれも均一の単なる席ではないことを認識するのにそう時間はかからなかった。調査の初日、筆者は暖簾を潜り抜け、正面の席に通された。両端の席はすでに埋まっていた。正面の席のほうが、メニューは見やすく、ショーケースに並んだ焼き鳥もこちらを向いている。正面の席になぜ座る人がいなかったのか、筆者が調査ではじめに抱いた疑問だった。

店主と常連客にとって、両端の席は特別な

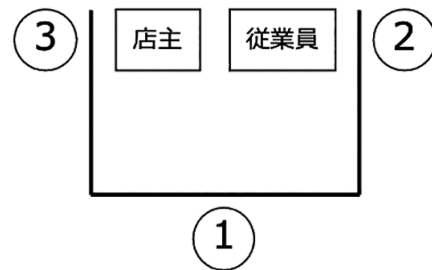


図1 筆者の座席位置の変化（1から順に変化）

なものだった。天神東地区に存在する屋台の店主のS氏は、「(客が) 入ってきた瞬間に席の配置を決める」という。新規（一見）客であれば、正面の席に通す。常連客が来た時のために、両端の席は空けておく。その時々状況に応じて通される客と、場所が与えられた常連客が座る椅子は違うように感じられた。

70日間の調査を通して、筆者が座る座席の位置も次第に変化した（図1参照）。正面の席から、従業員と会話がしやすい端の席、店主と会話することのできる左端の席へと移動した（図1）。筆者は調査中に、隣り合わせた客と会話をする事が多かった。しかし、ひとりで来る客にとって、両端の席は居心地が良いものである。天神西地区にある屋台Bに来るF氏は、「ひとりで入るから、（正面の席だと）会話ができない時もあるけど、ここなら大将と会話ができる」という。常連客にとっても、屋台内の一席は決して均質的な席ではない。

座席に対する店主と客の発言から、屋台を建築学が議論してきた「空間」として捉えるのではなく、インゴルドが提示する「存在する者」が結ばれたひとつの「場所」として理

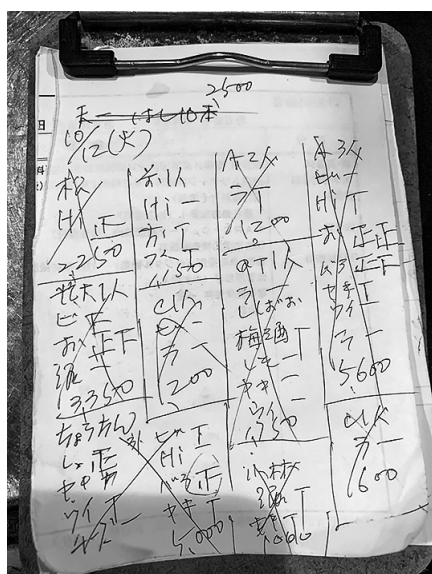


写真4 10月12日のある屋台の帳簿

解することはできないだろうか。調査中に筆者の問いはより具体的なものになった。

「京大」から「ななちゃん」へ

筆者が初めて屋台に入った10月11日、会計の帳簿には「京大」と書かれ、下に飲み物や食べ物の注文内容が書かれた。「京都大学の屋台の研究をしている学生」という立場を踏まえたものだった。筆者は異色の新規客だった。通常の新規客であれば、席番号やアルファベットで客を認識、区別する（写真4参照）。「A席に座った客」と認識される。そこに、客固有のアイデンティティはない。屋台Nに通うM氏は、「やっと顔と名前を覚えてもらった」と嬉しそうに語る。店主や従業員に名前を覚えてもらったあとは、帳簿に名前が書かれる。「A席に座った客」として

与えられた記号を脱ぎ捨て、「A席に座ったMさん」に変貌する。ちなみに筆者は、最終的に「ななちゃん」と帳簿に書かれた。23年間「ななちゃん」と呼ばれたことはなかった。少し気恥ずかしい感じもしたが、天神の屋台で新たに名を授かった気分だった。屋台で顔と名前を覚えてもらったことを嬉しそうに語る常連客の気持ちが少しわかった。

同じ屋台に何回通えば、個人的に認識されるのか。また名前と呼ばれるほどの関係性を築くにはどれくらいの時間を要するのか。「常連客」の線引きは曖昧なものであるが、何度も通うことで場所を与えられ、かつ名付けられることがひとつの指標であるようだ。

「自分の屋台」、自分の場所

屋台に入るために特別な資格は必要ない。老若男女問わず、お酒が好きな人も、そうでない人も、一堂に会する。福岡市〔2018〕の調査によると、屋台に行ったことがある福岡市民は7割を超えていた。しかし、7割という数字は「屋台経験層」に過ぎず、「年に数回も行かないが、今までに行ったことがある」人が経験層の8割を占める。つまり、多くの福岡市民にとって、屋台とは日常的に行く場所とはなっていない。月に数回以上利用する人「1ヵ月に平均4回以上行く」(0.3%)、「1ヵ月に平均1～3回行く」(0.9%)の割合は、合わせて1.2%に過ぎない。

客が座る席の位置や、帳簿に記入される客を表す呼称によって、筆者は常連客について述べてきた。1.2%の客が、他の客と「頻繁に訪れる」という条件のみで区別されるもの

ではない。屋台で席を与えられるということ、また承認されることを通して、常連客になる。「自分に合った屋台を見つけるといいよ」と屋台Nの常連客、O氏に言われたことを思い出す。O氏にとって、屋台Nが「自分の屋台」だ。屋台Kに来る常連客U氏は、「僕はここだけしか来ないっすね」とビールを飲みながら得意げに語ってくれた。U氏はテレビ局報道部の記者として、新入社員時代から、23年間屋台Kに通う常連客だ。「Kを日本一有名な屋台にしたい」と語り、屋台を取材するときは必ず、屋台Kに依頼している。

O氏やU氏にとって、それぞれの「屋台」は均一的な屋台を示すものではなく、「自分の屋台」として他の屋台とは区別されたものだ。店主が常連客に場所を与えると同時に、常連客も「自分の屋台」に「場所性」を見出している。

場所を持つということ

「人というものは、人として承認されること、換言すれば社会的成員権を承認されるということだ。物理的に述べると社会は一つの場所であるがゆえに、人の概念もまた場所依存的だ」と金〔2021: 59〕は述べる。屋台は都市の装置として、にぎわいを創出し、にぎわいの主たる担い手は常連客であろう。常連客と店主との掛け合いに加わることを目的と

して、屋台に来る観光客もいる。金の言葉を借りるのであれば、「常連客」というあり方が屋台に対して「場所依存的」な存在なのかもしれない。何にでも転用可能な空間の一部としての屋台ではなく、「この店の常連」たらしめる要素をもったひとつの場所が福岡県・天神にはあった。

席を与えられ、店主に「ななちゃん」と呼ばれる。常連客と杯を交わし、初日には量が多過ぎて困った「焼きラーメン」を、自ら声をかけ横に座る女性2人客と分けて食べる。店主は筆者が席に座るや否や、わかったように冷えたグラスにハイボールを注ぐ。初めて「場所を持つ」入り口に立っている気がする。安直な気持ちで、屋台研究の暖簾に立った調査初日とはまた違う入り口だ。次回の調査で約半年ぶりに屋台の暖簾をくぐる。屋台は筆者をどのように受け入れるのだろうか。まずはそれを知りたい。

引用文献

- インゴルド、ティム。2021。『生きていること 動く、知る、記述する』左右社。
- 金 賢京。2021。『人、場所、歓待—平等な社会のための3つの条件』青土社。
- 出口 敦。2004。「アジア的都市と屋台の魅力・活力・可能性」『エフ・ユー』1: 10-15。
- 福岡市。2018。「平成30年度 市政に関する意識調査」。